

平成 30 年度 学校の森・子どもサミット 開催報告

平成 30 年 7 月 30 日（月）～31 日（火）に平成 30 年度学校の森・子どもサミット福井県にて開催しました。

サミット 1 日目

（1）小学校児童による活動事例発表会

7 月 30 日、会場である福井県県民ホールには、北は北海道から南は鹿児島まで全国 10 校の発表校の子どもたちと先生が集まりました。台風の影響で残念ながら 1 校が参加を見合わせるようになってしまいました。他の発表校は交通の遅れなど影響があったものの、無事に到着。念入りなりハーサルが始まりました。



ホール前のロビーには、協賛企業や各団体による日頃の森林保全活動や環境教育に関する取組を紹介するパネルやパンフレット・チラシが設置され、ロビー、発表会場には続々と人が集まってきます。

13 時になり、いよいよ学校の森・子どもサミットが始まります。発表会の会場には、発表校の子どもたちを含む約 250 名が集まりました。

開会式では、主催者を代表して本サミットの実行委員会委員長である梶谷辰哉氏（国土緑化推進機構 専務理事）と実行委員の木下仁氏（林野庁 森林利用課 山村振興・緑化推進室

室長)が開会の挨拶を行いました。

その後は、澁澤寿一氏(NPO 法人共存の森ネットワーク 理事長)による「森林環境教育とESD」をテーマにしたキーノートスピーチがありました。

いよいよ、子どもたちによる発表の時間です。子どもたちはステージに上がる時は緊張した表情。それでも、発表が始まると、学校の紹介やフィールドとしている森林の特色など工夫を凝らして元気よく発表をしていました。それぞれの発表には客席から大きな拍手が送られました。

(2) 三方青年の家での体験活動

発表を終えた子どもたちは、若狭町の三方青年の家に移動しました。夕食を食べた後には、全国から集まった子どもたちがお互いのことを知るきっかけとなるネイチャーゲームを行い、子どもたちも、だんだん打ち解けてきました。



その後、開催地である福井の森林について学びました。日頃、森での活動を体験している子どもたちは、自分の住んでいる地域と比べながら学びを深めることができたのではないのでしょうか。

また、福井の伝統工芸である「組子細工」のキーホルダー作りも体験しました。昔から木

材がいろいろな形で活用されてきたことを感じ、学ぶことができたと思います。みんな真剣な表情で、集中して取り組んでいました。



(3) 森林環境教育を考える2つの分科会

一方、発表会のあと、福井市の会場では、教員や一般参加の人たち向けに森林環境教育を考える2つの分科会が開催されました。

分科会1は、認定NPO法人アサザ基金の飯島博氏を講師に迎え、「生き物や地域が発する問いに応えるまちづくり学習」をテーマに開催しました。子どもたちが自分の地域についてよく知ること、地域の可能性やそれを活かしたまちづくりの提案等の具体的な事例紹介のほか、自分の考えを提案し、実現に向けて自ら考え行動できる人材になるための学習プログラムの紹介があり、本当の学習は問いを共有し、深く調べ考えることの必要性をお話しいただきました。



分科会2は、「森のようちえん 幼児期の子どもの可能性」をテーマに、森のようちえん全国ネットワーク理事長の内田幸一氏が講演を行いました。この分科会には、福井県内の保育園・幼稚園関係者、自然体験活動者が多く参加。従来の保育と森のようちえんの違い、その教育効果などについて、ご自身の体験や事例をもとにご紹介いただきました。

サミット2日目

(1) 福井県美浜町の久々子湖での体験活動

サミット2日目は、久々子湖にバスで移動しました。グループに分かれて、生きもの調査とシジミ採り体験を行いました。湖の中に入った子どもたちは、真剣な表情で生き物やシジミを探していました。





(2) 気山小学校でのふり返し

湖での活動の後は、地元からの発表校である気山小学校に移動。地元の方が用意してくれたしじみ汁を味わいました。また、気山小学校の皆さんが作った梅ジュースもいただいて、一息つきました。

そして、湖での体験活動を振り返る時間を持ちました。それぞれがどんな生き物を見つけたかを発表します。豊かな森が、湖の多様な生態系につながっていることを体感する時間となりました。



(3) 2日間のふり返し

最後に、2日間のサミットをふり返し、はがきに書くワークショップを行いました。地元の企業に提供していただいたヨシで作られたはがきに、それぞれが心に残ったことやこれから伝えたいことを書きます。たくさんの思いや気づきが綴られたはがき。今回参加した子どもたちが、このサミットからたくさんの学びを持ち帰ってくれることが伝わってきました。

